

鎌倉期から江戸初期における地震災害情報

一畿内で書かれた日記にみる地震の記録一

日本大学文理学部 非常勤講師* 下川 雅弘

View of information that assumed earthquake disasters an example from late 12th century to early 17th century

Masahiro SHIMOKAWA

College of Humanities and Sciences, Nihon University,
Sakurajosui 3-25-40 Setagaya-Ku, Tokyo 156-8550, JAPAN

This research is to consider how information was transmitted and how was recorded from late 12th century to early 17th century. I take documents on strong earthquakes as materials for this consideration. These documents are the diaries kept in Kyoto, Nara and Osaka area in that period. I would like to think concretely on these points: (1) What was written in these diaries on information on Earthquakes and how far away the earthquakes happen from Kyoto, Nara and Osaka? (2) How these information was transmitted and how fast these was? (3) Whether information on earthquakes were remained and when then happened? (4) For what purpose these information was recorded?

Keywords: Information, Strong Earthquakes, Earthquake Disasters, Diaries, Records.

§1. はじめに

地震に伴う被害家屋・死傷者数などの災害情報が、戦争や犯罪などの情報とともに、すべての時代を通じて、人びとの強い関心の対象であったことは想像に難くない。こうした地震災害情報について、前近代を対象に論じた研究としては、北原糸子氏によってまとめられた『近世災害情報論』[北原(2003)]が、第一に取り上げられるべき成果であるといえよう。その内容はきわめて多岐にわたり、災害社会史と呼ぶに相応しいものであるが、なかでも情報論の観点から捉えると、災害情報を伝える媒体についての史料論や、遠隔地への情報伝達の実態解明に関する研究成果は、とくに重要な意味を持つものと考えられる。

以上のように、近世を事例とした災害情報論が、豊富な成果を生み出しているのに対し、これを中世の事例によって追求した研究は、これまでほとんど行われてこなかった。しかし、「うわさ」という情報伝達のしくみから、中世社会の情報論を分析している酒井紀美氏が、「情報の伝達はどのように行われていたか」[酒井(1993)]の中で、情報伝達に果たした「うわさ」の役割の重要性を検証する事例として、応永三十二年(1425)八月十四日の相国寺炎上事件を冒頭に取り上げ、その災害情報がどのようにして伝達されたかを検討しているように、災害という事象は、中世社会における情報研究にとっても、きわめて重要な検討素

材であるといえよう。このように災害が情報論にとって有意義な題材となり得るのは、中世社会においても、身分や階層を越えて甚大な被害をもたらす地震などの災害情報が、多くの人びとにとって最大の関心事の一つであったからに他ならない。

そこで、本稿では、鎌倉期から江戸初期における地震災害情報について、どのような範囲の情報が、どのような経路・手段によって、どれくらいの速度で伝達・収集されたのかといった点をおもな分析視角として、実証的な検討を試みたいと考える。その分析対象・方法については以下の通りである。

まず、『日本被害地震総覧』[宇佐美(2003)]・『理科年表』[国立天文台(2006)]・『地震の事典』[宇津・他(2001)]などを参考に、鎌倉期から江戸初期(12世紀末～17世紀初め頃)における被害地震の中から、多数の建築物の倒壊や破損、あるいは死者の発生が、信憑性の高い史料によって確認されるものを、大規模被害地震として選定し、すべて抽出する。こうした大規模被害地震を対象を限定して分析を行う意図は、これらの地震災害情報が、小規模被害地震や被害のない地震に比べて、とくに人びとの強い関心の対象になると考えられるからである。つぎに、中世において信憑性の高い史料が最も多く伝存する畿内に地域を限定し、ここで書かれた日記(おもに京都・奈良・大坂等で書かれた天皇家・公家・寺社家等の私

* 〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40
電子メール: smkwmsr@chs.nihon-u.ac.jp

日記や役務日記(原則として事件とほぼ同時に書かれた日次記)の中に、先ほど選定・抽出した大規模被害地震に関する情報が、どのような範囲にわたって記載されているかを中心に、その伝達方法や速度についても検討していく。

補足になるが、ここでいう地震災害情報が記載された範囲とは、被害家屋や死傷者数といった被害状況に関する内容的な範囲を意味するだけでなく、とくに本稿では、どのような地域の情報までが記録されているかといった空間的な意味や、どれくらい以前の情報が記録を通じて参照されているかといった時間的な意味を含めて考察したいと考えている。畿内で書かれた日記の中に、空間的にどれくらい遠方の地震災害情報が記録されているかを分析することは、当時の畿内の公家・寺社等が、どれくらい距離の離れた地域の情報までを収集していたかが判明するだけでなく、彼らが遠隔地の中でもとくにどのような地域に興味・関心を抱いていたかについて、確認できるといった意味があろう。また、大規模被害地震が発生すると、過去の類似例が参照されるということは、おそらく人びとにとって普遍的に存在するのではないかと思われるが、こうした地震の発生時に、畿内で書かれた日記の中で、時間的にどれくらい以前の地震災害情報が記録を通じて呼び起こされているかを分析することは、当時の畿内の公家・寺社等が、来るべき地震に備えて過去の地震災害情報をどのくらい蓄積・管理していたかについて、考える手がかりとなるだろう。

なお、本稿において史料とする畿内で書かれた日記については、『増訂大日本地震史料』・『新収日本地震史料』を出典として該当のものをすべて抜き出し、適宜、史料原典の刊本等によってこれを補訂した。また、本稿で取り上げる大規模被害地震、および当該地震について記載のある畿内で書かれた日記については、これを整理した【表】を作成・掲載している。併せて参照されたい。

§ 2. 鎌倉期における大規模被害地震と災害情報

2.1 元暦二年七月九日(1185年8月6日)の地震

この地震は、山城・近江、とくに京都の白河周辺での被害が大きく、法勝寺・法成寺をはじめ京都の寺社・民家が倒壊・破損し、多数の死者が発生している。

この地震について記載のある日記のうち、まずは、藤原忠親の記した『山槐記』をみると、「法勝寺九重搭頽落重々、(中略)遣人令見之処、申旨如此」「献使者於入道大相国<花山院>、尋申御所安否、(中略)使者順路見之、申云、築垣等皆壊、法成寺内廻廊皆顛倒(後略)」(七月九日条)とあり、忠親は、使者を遣わして法勝寺九重搭をはじめとする白河の被害情報を意図的に収集している他、天皇の安否など

を確認するために遣わした使者から、法成寺など洛中の被害情報についても報告を受けている。また、「密々見法勝寺破壊、可悲々々」(七月十七日条)のように、法勝寺の被害については、後日、自ら実見に訪れている。また、『玉葉』を記した九条兼実も、派遣した使者や見舞いの来訪者から、諸所の被害情報を得ていたようである[西山(1998)]。

つぎに、藤原経房の記した『吉記』をみると、「後聞今日顛倒所々」(七月九日条)に続けて、京中の寺社だけでなく、延暦寺・三井寺といった隣国近江の被害状況をも伝聞し、列記している。また、『山槐記』によると、「後聞、宇治橋皆以顛倒、(中略)又聞、近江湖水流北、水減自岸或四五段、或三四段、(中略)又自美濃伯耆等国来之輩曰、非殊之大動」(七月九日条)のように、宇治・近江といった京都郊外や隣国の被害情報にとどまらず、忠親は、美濃・伯耆といった遠隔地より上洛した者から、それぞれの国元での揺れの程度がたいしたものではなかったとの情報を得ている。日記中のこうした記述は、情報を広く収集した上で、後日、書き足されたものと考えられる[高橋(2005)、西山(2000)]。このように、日次記においては、収集した情報を、後で地震発生日の記事に追記したり、まとめて清書したりすることは、あまり珍しくなかったといえる。

以上のように、日記の記主である公家たちは、使者の派遣や実見、来訪者からの伝聞によって地震災害情報を積極的に収集し、また、おもに他国の情報については、他者からの伝聞などによって、後日、これを得ていたのである。

さて、『山槐記』には、「午刻地震、五十年已来未覚悟」(七月九日条)、『玉葉』には、「古来雖有大地震事、未聞損亡人家之例」(七月九日条)とあり、彼らは地震発生とともに、自ら知り得る過去の地震と照らし合わせて、今回の地震がいかに甚大なものであったかを述べている。このように、やはり大きな地震が発生すると、人びとは過去の地震災害の情報を参照しようとする傾向にあったようだが、ではこの元暦二年の地震災害に関する記録は、この先どれくらいまで参照すべき情報として扱われていたのだろうか。

洞院公賢の記した『園太暦』には、貞和元年(1345)に比叡山延暦寺の根本中堂の常燈が消滅した際、「件常燈事祈謝沙汰、内々有其沙汰、而准拋例被尋之処、兼運注進了」(五月一日条)として過去の類例が調べられ、「元暦二年<乙丑>、七月九日、大地震、山上坂本同舎・搭廟、或傾危或顛倒、根本中堂傾北方(後略)」(同日条)のように、元暦二年の地震の情報が参照されている。また、詳しくは後述するが、文安六年四月十二日(1449年5月4日)の地震の際にも、「大地震并御祈等之例」として元暦二年の地震が、過去の地震災害情報の一つとして取り上げられている。このように、約150年、250年後におい

でも、元暦二年の地震災害情報に関する記録は脈々と受け継がれ、時に応じて参照されていたのである。

2.2 正嘉元年八月二十三日(1257年10月2日)の地震

この地震は、鎌倉での被害が大きく、寺社・民家が倒壊・破損している。

しかし、畿内で書かれた日記において、この地震災害情報について記載のあるものはまったく存在しない。この地震が畿内では無感であったことに加えて、おもな被害地域が鎌倉という遠隔地であったことが、その理由であると考えられる。

2.3 正応六年四月十三日(1293年5月20日)の地震

この地震は、鎌倉での被害が大きく、建長寺の火災をはじめ寺社・民家が倒壊・破損し、多数の死者が発生している。

同じく鎌倉に被害をもたらした地震であるにもかかわらず、正嘉元年の地震とは違って、この地震については、三条実躬の記した『実躬卿記』に、「去十三日暁関東大地震、及数刻之間、將軍御所并若宮ヨリ始て、至在家民屋等多以破損、人又多死去之由風聞、山岸等又散々、凡非所及言語云々」「(補書)建長寺顛倒、仍火出来焼失云々」(四月二十四日条)とあり、鎌倉での被害情報が比較的詳細に書き留められている。実躬は、地震当日の記事に、京都における揺れを記録しているのであるが、このように京都も有感であったことや、鎌倉での被害が多数の死者を出すほどの大惨事であったことから、彼はこの地震を日記に書き留めたのではないかと考えられる。また、実躬が鎌倉での被害を四月二十四日条に記していることから、少なくとも地震発生11日後には、鎌倉の地震災害情報が京都にもたらされていたことが判明する。

さらに、『実躬卿記』には、鎌倉での被害について、「先代未聞珍事也、元暦元年歟、有如此事歟」(四月二十四日条)と記されており、ここでも、大地震の発生に伴って、元暦元年(二年の誤りか)の地震といった過去の情報が参照されている。

2.4 正和六年正月五日(1317年2月17日)の地震

この地震は、京都での被害が大きく、清水寺の火災をはじめ寺社・民家が倒壊・破損し、死者も発生している。

花園天皇の記した『花園天皇宸記』によると、「(裏書)後聞、地震之間人家或顛倒云々、白河辺五人有死云々、元暦以来如此地震未有歟、近代未曾有云々、正応関東大地震数日、其時尚京都不如此云々」(正月五日条)とあり、京中の被害情報を、後日、伝聞により得ていたことが分かる。また、ここでも元暦二年や正応六年の地震の情報が、今回の地震との

比較材料として引用されており、とくに正応六年の地震については、当時の関東における余震の情報が京都にもたらされ、それが20数年後にまで参照すべき記録として伝えられていたことが確認される。

以上の検討の中より、鎌倉期における畿内からみた遠隔地(本稿では、地理的に畿内と隣接していない国とする)の地震災害情報について整理しておく、大規模被害地震以外の地震を含めても、正応六年の地震における鎌倉の被害情報が、遠隔地から畿内に伝達された唯一の事例である。記録として伝存されていないだけで、実際にはこの他の地域においても、鎌倉期にある程度の規模の被害地震が発生した可能性は、まったくないとは言いきれないが、にもかかわらず、鎌倉での地震災害情報のみが、畿内にもたらされた理由は、鎌倉という場所が、幕府の所在地として京都の朝廷などから重要視されていたからであると同時に、ひとたび強い地震が起こると、他所に比べて甚大な被害が発生するだけの大都市として、鎌倉がとくに成長を遂げていたからであると推測される。

§ 3. 南北朝・室町期における大規模被害地震と災害情報

3.1 康安元年六月二十四日(1361年7月26日)の地震

この地震では、畿内・紀伊で大きな震害があり、東寺・四天王寺・熊野大社をはじめ寺社・民家が倒壊・破損し、また、摂津・阿波・土佐で津波があり、多数の死者が発生したという。

三条公忠の記した『後愚昧記』に、「後聞、依今暁大地震四天王寺<摂州>金堂顛倒、成微塵了、(中略)此事、天王寺執行孝順注進京都云々、当別當<梶井宮>奏聞云々」(六月二十四日条)とあり、摂津の四天王寺の被害情報が、後日、執行の孝順によって京都に報告されていたことが確認できる。柳原忠光の記した『忠光卿記』では、六月二十六日条の中に、「伝聞、天王寺金堂、去廿四日寅時顛倒、地動之故云々」とあることから、摂津の被害情報は、地震の2日後には京都に伝えられていたものと考えられる。また、近衛道嗣の記した『後深心院関白記』によると、「伝聞、去月廿二日同廿四日大地震之時、熊野社頭并仮殿以下、三山岩屋以下<秘所秘木秘石等>、悉破滅之由、三山注進云々」(七月三日条)とあるように、少なくとも地震発生9日後の七月三日には、紀伊の熊野大社の被害情報も、京都に届けられていたことが分かる。

さらに、『後愚昧記』には、「(裏書)正和以後有如此事哉、(中略)正和六年正月三日五日大地震、其外小動度々、其時も龍神水神所動也、(中略)今暁も水神動也、(中略)正和二ハ四日六日なども小動也、

大動ハ二ヶ度也、今度ハ大動五ヶ度、小動不及勝計云々(六月二十四日条)と記されている。[萩原・他(1995)]は、水神が動いたという文言から、当時の人びとがこの地震を海洋地震と理解しており、各地の沿岸津波の情報が京都に到達していたことを示唆しているとの見解を述べている。けれども、地震勘文などでは、「水神動」「龍神動」というのは常套句として使用されており、たとえば、宝徳三年十月十三日(1451年11月6日)・明応二年十月三十日(1493年12月8日)・永正九年六月九日(1512年7月21日)といった津波の発生が考えにくい地震の場合でも、こうした文言を記した史料が存在していることから、「水神動」をもって、京都に各地の津波情報がもたらされていたとするのは、妥当ではないと考える。なお、この地震の場合にも、正和六年の地震における余震回数や規模といった情報が、過去の事例として持ち出され、今回の地震との比較材料にされている。たび重なる余震による不安が、過去の地震情報を参照しようと思わせるきっかけになったものと考えられる。

3.2 永享五年九月十六日(1433年10月29日)の地震

この地震は、鎌倉での被害が大きく、寺社・民家が倒壊・破損し、死者も発生している。

伏見宮貞成親王の記した『看聞日記』、満濟の記した『満濟准后日記』の地震当日の記事には、この地震により京都でも揺れのあったことが記されている。その後、満濟は、日記の十月二十六日条に、「抑関東有不思議之怪異、先大地震、堂舎顛倒人多死、又八幡宮<鶴岡敷>金燈炉焼失<金、焼云々>、又刀禰川逆二流云々」と、鎌倉をはじめ関東での被害情報を書き留めている。少なくとも満濟は、地震発生から1か月以上を経た翌月二十六日までには、この地震が関東において甚大な被害を及ぼしたという事実を知ったのである。

3.3 文安六年四月十二日(1449年5月4日)の地震

この地震は、京都での被害が大きく、仙洞御所・東寺・清涼寺をはじめ寺社・民家が破損し、長坂口では山崩れにより、死者も発生している。

『康富記』を記した中原康富は、四月十三日条の中で、伝聞によって知り得た京中の被害情報を詳細に書き留めている。また、四月十四日条には、「去十日以来連日地動不休、嗟峨积迦并五大尊顛倒事、自室町殿被遣御使被檢知云々、斎藤新左衛門尉敷敷」「神泉苑築地等破損事、被遣両奉行<矢部長門入道、菅田入道>、被檢知云々、皆依地震儀也」とあり、被害情報の調査のために、幕府が嗟峨の清涼寺や神泉苑に使者を遣わしていたことが確認できる。[西山(1997)]は、康富が記した被害情報は、こうした幕府などに上申されてきた情報を、彼が伝聞したもの

だろうと推測している。さらに、奈良において『経覚私要鈔』を記した興福寺の経覚は、「昨日自京下向者語云、京都ニハ地震未日々ニ不止、結句去十二日宵、去四月十二日大地震ニ不矢<失カ>築地以下又懐<壊>云々、希代事也、既及六十余日敷、誠先代未聞事者哉(六月十四日条)、「又語云、地震自四月于今不退云々、是又何事表事哉、難知々々(七月二日条)と、京都の情報を聞き書きしており、地震の数か月後になって、京都での地震および余震の情報が、奈良の経覚のもとに届けられていたことが分かる。

さて、再び『康富記』をみると、「従局務、去文安元年十一月十二月地震時内外典御祈事、就聞及注置敷、可注給之由被示之、引見件年記之処、十一月末、十二月初比紛失之間、無正体之由返答申了(四月十二日条)と記されており、中原康富は、文安元年十一月二十二日(1444年12月31日)の地震情報を上申するよう命じられている。中原氏は、太政官外記を世襲する家系であり、その職務として先例の調査・上申を求められたのだが、文安元年十一月～十二月の記録については、これを紛失してしまっており、職務が果たせなかったというのである。こうした事実により、当時の朝廷では、本来、外記によって過去の地震情報が保管されていた姿が明らかとなろう。また、四月十三日条には、「蔵人右小弁<勝光>、今朝被尋之間、御祈禱先例両局務被注申之、注進草見及之間写取了、又伊勢備中守<貞親>、承仰、等持院殿以来地震御祈禱有無、又地震年々有重事哉可注進之由、自室町殿被仰下、被注進了、件草同令拝見了」とあり、日野勝光と伊勢貞親が、大地震による祈禱の先例や、足利尊氏以来の地震と祈禱の有無について、調査を依頼していることが分かる。これにより上申すべき調査結果の案が、「文安六四十三、局務被注遣伊勢備中案<以上表書>、大地震近例」、「文安六年四月十三日、官務被注進蔵人右少弁之案、大地震并御祈等之例」として、これに続けて書き留められており、前者では、「観応元(1350)年五月廿三日大地震」、「康安元(1361)年六月廿一日大地震」、「貞治元(1362)年五月十七日西半大地震」、「永和二(1376)年四月廿五日大地震」、「明德二(1391)年十月十六日大地震」の地震とその祈禱の先例が、局務の清原業忠によって上申され、後者では、「天長四年(827)四月七日」、「天慶元年(938)四月十五日」、「嘉保三年(1096)十一月廿四日」、「元暦二年(1185)七月九日」の大地震とその祈禱の先例が、官務の小槻長興によって上申されている。このように、太政官外記局には、室町中期においても、古代以来の詳細な地震情報とその祈禱の先例が、蓄積・管理されていたのである。

以上の検討の中より、南北朝・室町期における畿

内からみた遠隔地の地震災害情報について整理しておく、大規模被害地震以外の地震を含めても、永享五年の地震における鎌倉の被害情報が、遠隔地から畿内に伝達された唯一の事例である。当時の鎌倉には、室町幕府により鎌倉府が設置されていたが、永享年間には京都の将軍家と鎌倉公方が緊張関係にあったため、京都方は関東の情報に敏感になっていたとも考えられる。地震発生から1か月以上後とはいえ、鎌倉での地震災害情報が京都にもたらされた理由は、こうした点に求められる可能性もあろう。

§ 4. 戦国期における大規模被害地震と災害情報

4.1 明応七年六月十一日(1498年6月30日)と明応七年八月二十五日(1498年9月11日)の地震

前者の地震は、西日本、とくに九州での被害が大きく、寺社・民家が倒壊・破損して死者多数といい、後者の地震では、東海地方の太平洋岸で津波があり、同じく多数の死者が発生している。

後掲の【表】にある通り、前者の地震については、畿内で書かれた多くの日記にその記載があるが、これらはすべて京都における揺れを書き留めたものばかりであって、畿内・他国に限らず、その被害情報にはまったく触れていない。そこで、以下においては、後者の地震のみについて述べていく。

この地震についても、畿内で書かれた多くの日記に記載されているが、そのほとんどは京都における揺れを書き留めたもので、それ自体はかなり強いものであったようであるが、前者の地震と同様に、畿内ではとくに大きな被害はなかったと考えられる。この中でただ一つ他国の被害情報を記載している日記が、近衛政家の記した『後法興院記』である。その九月二十五日条には、「伝聞、去月大地震之日、伊勢、参河、駿河、伊豆大浪打寄、海辺二三十町之民屋悉溺水、数千人没命、其外牛馬類不知其数云々、前代未聞事也」とあり、地震発生から約1か月後に、伊勢・三河・駿河・伊豆における甚大な津波被害情報が、京都にもたらされていたことを知ることができる。

つぎに、三条西実隆の記した『実隆公記』と、東坊城和長の記した『和長卿記』には、この地震について、それぞれ「早朝地震大動、五十年以来無如此事云々、予出生以来、未知如此之事」(八月二十五日条)、「辰刻有大地震、予生前無如此儀」(八月二十五日条)と書かれている。彼らは、自分のこれまでの人生における過去の経験を振り返って、今回の地震の強さを再確認しているのである。

4.2 文亀元年十二月十日(1502年1月18日)の地震

この地震は、越後での被害が大きく、同国国府の民家が倒壊し、死者も発生したという。

しかし、この地震は畿内において無感であり、また、被害地域が越後国府という遠隔地の地方都市であったため、畿内で書かれた日記の中で、この地震について触れたものはまったく存在しない。

4.3 永正七年八月八日(1510年9月11日)の地震

この地震は、摂津・河内での被害が大きく、四天王寺をはじめとする寺社が倒壊・破損し、死者も発生している。

この地震については、京都で書かれた3つの日記に記載されているが、いずれも強い揺れを感じたことのみを記しており、京都において大きな被害はなかったようである。ただし、このうち五条為学が記した『拾芥記』だけは、「夜寅剋大地震、天王寺廿一社悉顛倒云々」(八月七日条)とあるように、摂津の四天王寺における被害情報を書き留めている。

これまでの検討の中より、ここでは鎌倉期から戦国期における、畿内からみた遠隔地の地震災害情報について整理をしておきたい。この期間を通じて、畿内にもたらされた遠隔地からの被害情報は、大規模被害地震以外の地震を含めても、正応六年と永享五年の地震における鎌倉での地震災害情報と、明応七年八月の地震における伊勢・三河・駿河・伊豆での津波災害情報のみである。(元暦二年の地震において、美濃・伯耆の情報が伝えられてはいたが、これは京都での甚大な被害と比較するために、被害のなかった両国を書き添えたものである。被災地からの地震災害情報としては、数に含めないものとする。)これに、近江を除く畿内の隣接国からの被害情報を併せても、先述した康安元年の地震における紀伊での地震災害情報の他に、応永七年十月二十四日(1400年11月11日)、「今夜戌刻地震、或仁云、於勢州以外之大動云々、京都少動也」(『兼敦朝臣記』十月二十四日条)と、永享五年正月二十四日(1433年2月14日)、「去廿四日大地震、伊勢国以外、鈴鹿山大石ユリ抜云々」(『満濟准后日記』正月二十八日条)における、伊勢での地震情報(ただし、どちらも被害情報ではない)が加わるだけである。

京都である程度強い地震が起きると、たとえば、文安六年の地震(『氏経卿神事日次記』)をはじめ、文明三年五月十四日(1471年6月2日)、同八年六月十六日(1476年7月7日)(以上『内宮禰宜荒木田氏経引付』)、永正六年三月七日(1509年3月27日)(『内宮禰宜荒木田守晨引付』)の地震などでみられるように、しばしば伊勢神宮に祈祷が命じられている。応永七年と永享五年正月における伊勢での地震情報についても、こうした伊勢神宮と京都の交流によって、もたらされたものかもしれない。伊勢神宮への祈祷は、明応七年八月の地震の際にも命じられている(『実隆公記』)。また、伊勢大湊での津波による大規

模な被害状況については、同宮で記された『内宮子良館記』に書き留められている。このように考えると、『後法興院記』に記された明応七年八月の地震における伊勢・三河・駿河・伊豆での被害情報のうち、少なくとも伊勢における津波災害情報については、こうした公家たちと伊勢神宮との交流によって、同国より直接京都に伝えられた可能性があるものと考えられよう。

以上のように、鎌倉期から戦国期における遠隔地からの地震災害情報は、幕府・鎌倉府の所在地である鎌倉と、熊野大社・伊勢神宮の所在地である紀伊・伊勢における被害情報に限られており(明応七年八月の地震における三河・駿河・伊豆の被害情報は、唯一の例外といえる)、逆にみると、鎌倉・紀伊・伊勢などは、この期間における畿内の公家・寺社たちにとって、政治的にも宗教的にも興味・関心の強い地域であると考えられ、こうした地域以外の遠隔地からの地震災害情報は、京都にもたらされることがあっても、彼らによって日記に書き留められることはほとんどなかったのである。

§ 5. 織豊期における大規模被害地震と災害情報

5.1 天正十三年十一月二十九日(1586年1月18日)の地震

この地震は、中部内陸・東海・近畿地方、とくに飛騨・美濃・尾張・伊勢・近江での被害が大きく、大垣城・長島城・長浜城および城下で、火災ならびに民家が倒壊・破損し、飛騨では山崩れにより、多数の死者が発生している。また、京都でも東寺・三十三間堂などの寺社が破損している。

この地震について、畿内で書かれた日記の記主は、それぞれの所在地である京都・奈良・大坂において感じた強い揺れについて書き留めているが、このうち複数の日記には、他国、とくに遠隔地の地震災害情報が書き残されている。梵舜が京都で記した『舜日記』をみると、「近国之浦浜々<之カ>屋、皆波ニ溢レテ、数多人死也、其後日々ニ動コト、十二日間々也」(十一月二十九日条)のように、近国の浦浜での津波被害情報を伝えている。この地震では、伊勢・尾張・近江・若狭などで津波(高波による浸水とする考え方など諸説あり)が発生したことが知られており[飯田(1987), 八木・他(1984)], おそらくこうした国のいずれかの情報が、京都にもたらされたものと思われる。また、英俊が奈良で記した『多聞院日記』には、「今日モ又少震了、美濃、尾張、江州ニハ今度ノ大地震ニ人多死云々」(十二月七日条)とあるように、美濃・尾張・近江という具体的な国名とともに、その被害情報が記載されている。このように、地震発生から8日後には、諸国の被害情報が奈良に伝えられていたのである。さらに、宇野主水が大坂で記した『宇野主水

日記』には、「国々ニテ一在所ヲ悉地震ニユリワリ、人屋倒、人多死スト云々、又国ニヨリサシテユラヌ国モアルナリ」(十一月二十九日条)とあり、国による被災状況の違いにまで言及している。こうした事実から、少なくとも数か国の地震災害情報が、記主によって収集されていたと推測される。それを示すように、日記の同年末の「追而」には、別記として飛騨の帰雲城における被害情報が、「飛州ノ帰雲ト云在所ハ(後略)」に続けて詳細に記載されている他、「近江越前加賀別而大地震、和泉河内摂津同前、六十余州大地震同前也、サレドモ別而破倒タル国ト、サホドニナキト差別在之云々、一々難知之、不及注之者也」との叙述がなされている。

さて、再び『多聞院日記』をみると、「先年木沢左京亮生涯之年正月廿日ニ大地震了、其以来ハ去七月五日大地震也、何モ昨夜ノホト事々敷ハ無之」(十一月晦日条)のように、ここでも過去の地震情報が呼び起こされている他、「菊岡侍従公当年九十三歟、語<云カ>、吾レ九才ノ時卅日地震アリシヲ慥ニ覚云々」(十二月五日条)と、93歳の古老から過去の地震情報(おそらく明応七年の地震か)を聞き出している。同様の記述は、「八十年已来無之由申也」(十一月二十九日条)、「八十歳之老人モ如此事見聞タル事無之云々」(年末追而)のように、『宇野主水日記』の中にも存在する。さらに、翌年三月になっても余震が続くと、「旧冬十一月廿九日至今日、浅深多少ハアレ共、終ユリヤム事無之、永正七年<庚午>八月八日刁刻大地震所々破損、天王寺石ノ鳥居崩、藤井寺モクツル、同数日ユリテ九月廿□□五夜ノ半ヨリ東風大雨、奈良中方々大破□<ニカ>及ト旧記ニ在之、心細キ者也」(『多聞院日記』翌三月十四日条)のように、その不安により旧記を調べて、永正七年の地震における余震情報を参照している。このように、寺院においても、過去の地震災害情報が旧記などによって保管され、大地震の際に利用されていたことが判明するのである。

5.2 文禄五年閏七月九日(1596年9月1日)と文禄五年閏七月十三日(1596年9月5日)の地震

前者の地震は、豊後での被害が大きく、とくに津波によって死者多数といい、後者の地震は、山城・摂津・和泉、とくに京都の伏見周辺での被害が大きく、伏見城・東寺・方広寺をはじめ京都の寺社・民家が倒壊・破損し、同じく多数の死者が発生している。

前者の地震に触れている畿内で書かれた日記は、山科言経の記した『言経卿記』と、壬生孝亮の記した『孝亮宿禰記』のみであり、いずれも京都で感じたわずかな揺れを書き留めたものに過ぎない。そこで、ここからは後者の地震だけを検証していく。

まず、『言経卿記』の閏七月十三日条には、最初に本願寺・興正寺など言経邸周辺、続いて伏見城・方

広寺など京中・郊外、最後に「兵庫在所崩了、折節
火事出来了、悉焼了、死人不知数了」「和泉堺、事外
相損、死人余多有之」「大坂ニハ御城不苦了、町屋
共大略崩了、死人不知数了」など畿内の他国における
被害情報が記されている。これらの地震災害情報は、元暦二年の地震などの場合と同様に、収集した
情報を、後日、地震当日の記事に書き加えたものと
考えられる。言経は、徳川家康父子を見舞うため、二
十四日に伏見を訪れているのであるが、[松岡
(2006)]によると、言経宅周辺の情報は、言経が地震
当日に実見し、京中・郊外の情報は、伏見への見舞
いの際に道中で見聞したり、言経邸への来訪者から
得たりしたものではないかという。また、[西山(1994)]
は、「冷早朝ニ堺へ下向了」(閏七月十三日条)、「四
条殿冷へ見舞ニ和泉堺下向了」(閏七月十五日条)、
「下女ツル父、堺ヨリ上洛了、一昨日下也云々、来了、
冷泉女中十二日夜大地震ニ家顛倒ニ付而死去也
云々」(閏七月十六日条)、「四条、堺ヨリ上洛了、冷
之事如昨日聞了」(閏七月十七日条)といった記事から、
冷泉為満が堺に残した妻子の安否を気遣い、地
震当日に下向したものの、妻ツルは地震により死去し
てしまった事件について、その顛末を述べているが、
閏七月十三日条に掲載されている和泉・摂津の地震
災害情報は、地震直後に京都と堺を往来した冷泉為
満や四条隆昌など、言経と深い親交のあった者たち
から伝聞した可能性も高いただろう。他にも同日条には、
「近江国ヨリ関東ハ、地動無之云々」といった記載が
あることから、言経は様々な手段を用いて、かなり広
範囲の地震情報を収集していたものと考えられる。な
お、『言経卿記』には、「去夜子刻大地震、近代是程
事無之、古老之仁語也」(閏七月十三日条)との記述
があり、この地震においても、過去の地震情報を得る
ために、古老がその役割を担っていたことが判明す
る。

つぎに、義演の記した『義演准后日記』の閏七月
十三日条、およびその別記である『文禄大地震記』を
みると、東寺・方広寺・伏見城などの被害情報が、詳
細に書き留められている。閏七月十四日条に、「今日
夜中、大仏、東寺為見舞発足、仰天不斜、委如右記、
帰路ニ伏見へ越了、言語道断次第也」とあることから、
こうした地震災害情報は、おもに義演が実見したもの
と思われる。また、他国の情報については、『義演准
后日記』に、「伝聞、(中略)唐人堺津ニ逗留、大略地
震ニ死去云々、実説歟、追而可記之」(閏七月十四
日条)、「伝聞、(中略)今度来朝唐人モ、下人少々地
震ニ死云々」(閏七月十五日条)とあり、明の使節の
ほとんどが地震で死亡したらしいと、地震の翌日に堺
より伝えられているものの、その翌日には下人が少々
死亡したらしいというように、その内容が訂正されて
いる。堺から京都への情報伝達の早さは注目されるが、
遠方かつ地震直後という事情もあって、その正確さと

いう面では混乱している様子がうかがえる[萩原・他
(1989)]. さらに、閏七月十七日条には、興山上人宛
の義演の書状が写されており、その中で彼は、「先々
高野山無事哉、是又別而無御心元候」と、高野山で
の被害の有無を尋ねている。その返事として、「高野
一山無為之由、上人返事、先安堵也、但大塔ノ九輪
クサリ四筋共ニキルト云々、猶重而可尋遣之、南
都諸伽藍無為云々、比叡山同前、先珍重々々」とあ
るように、興山上人は、高野山および奈良の諸寺院と
比叡山の無事を義演に伝えている。醍醐寺の座主で
あるとともに東寺長者でもあった義演にとって、真言
系寺院、とくに高野山や東寺の被災状況は、最大の
関心事であったものと考えられる。

以上の検討により、織豊期における畿内からみた
遠隔地の地震災害情報について整理しておきたい。
まず、天正十三年の地震では、飛騨における詳細な
被災状況をはじめ、美濃・尾張・越前・加賀などとい
った諸国の情報が、複数の記主によって、畿内の日記
に書き留められている。また、文禄五年の地震の場
合には、遠隔地とはいえないものの、他国との往来や
書状によって、諸国における地震災害情報の取得が
頻繁になっている。こうした事実は、織豊期における、
諸国の情報への関心の高まりや、書状・往来による他
国との交流の広まりを示しているものと考えられよう。

§ 6. 江戸初期における大規模被害地震と災害情報

6.1 慶長九年十二月十六日(1605年2月3日)の地震

この地震では、震害はなかったものの、関東から九
州地方の太平洋岸で津波があり、多数の死者が発生
したという。

この地震については、畿内において無感であった
にもかかわらず、『義演准后日記』に、「旧冬十五日、
武蔵国江戸辺大地震之由注進云々、此辺不覚、誠
聊引震歟」(翌正月六日条)、『孝亮宿禰記』に、「近
日関東大地震有之、死人等多云々、又伊勢国、紫国
等有大地震云々」(翌正月十八日条)と記されている。
前者では、地震の発生から19日後に、江戸の地震
情報が京都に伝えられているが、地震の日付が誤っ
ている他、被災状況についてもとくに触れていない。
また、後者の場合には、関東・伊勢・紫国(これを「四
国」とする説もあるが定かではない)の地震情報が、
約1か月を経て京都にもたらされているが、こちらも津
波など具体的な被害の内容については不明である。
とはいえ、これらの記述は、畿内での無感地震につ
いて、鎌倉期以降、遠隔地の地震災害情報が残され
た最初の事例として注目されよう。

6.2 慶長十六年八月二十一日(1611年9月27日)

と慶長十六年十月二十八日(1611年12月2日)の地震

前者の地震は、会津での被害が大きく、若松城および城下で、民家の倒壊・破損により死者が多数発生し、後者の地震は、震害はなかったものの、三陸沿岸で津波があり、同じく多数の死者が発生している。

両方の地震について触れた日記として、山科言緒の記した『言緒卿記』と、舟橋秀賢の記した『慶長日件録』が存在する。けれども、これらの日記は、京都在住の記主によって書かれたものではあるが、この場合に関する限り、畿内で書かれた日記には当てはまらない。なぜなら、これらの記事を書いたとき、彼らは江戸に滞在中であったからである。駿府の徳川家康と江戸の徳川秀忠に対面するため、彼らは、同年九月二十四日に京都を出発し、九月三十日には駿府、十月十四日には江戸に到着している。この後しばらくして、彼らは、「辰刻大地震」(十月二十八日条)、「至夜地動」(十月二十九日条)(以上『言緒卿記』)、「午刻地震」(十月二十八日条)、「丑刻、地動」(十月二十九日条)(以上『慶長日件録』)と書き残しており、これらは、十月二十八日の三陸沿岸での津波と相前後して発生した地震を、江戸で感じて記述したものであると考えられる(これらの地震と津波の関係については、別稿を用意している)。さらに、それぞれの日記の十一月二日条には、「八月九日ニ、会津ノ柳津大地震、堂舎仏閣尽破滅之由、於御城、新庄宮内法印雑談有之了」(『言緒卿記』)、「新庄宮内法印相談云、八月九日会津郡大地震、城、町屋等悉顛倒、柳津虚蔵堂破滅云々、堂後山崩、堂倒落溪川、本尊等悉不見云々」(『慶長日件録』)と記されている。この日彼らは帰洛に先立ち、江戸城にて秀忠より振る舞いを受けており、約2か月半前の八月二十一日における会津での地震について、日付は誤っているものの、新庄直頼からその被害情報を聞かされたのである。たしかに、これらの記述は、畿内に直接伝えられた遠隔地の被害情報ではないが、畿内での無感地震について、遠隔地の地方都市における地震災害情報が、京都在住の彼らによって、鎌倉期以降、初めて日記に残されたという点において、貴重な史料であると考えられる。

6.3 慶長十九年十月二十五日(1614年11月26日)

と慶長二十年六月一日(1615年6月26日)の地震

前者の地震は、京都での被害が大きく、寺社・民家が倒壊・破損し、死者も発生したという。畿内で書かれた多くの日記には、京都で強い揺れのあったことが書き残されている。また、この地震により被害のあったという地域は、全国各地に存在しているものの、それを信憑性の高い史料によって確認することはほとんどできず、畿内で書かれた日記においても、遠隔地の被害情報は、まったく記録されていない。

後者の地震では、江戸での被害が大きく、民家が倒壊・破損し、同じく死者も発生している。しかし、畿内で書かれた日記の中で、この地震に触れたものは皆無である。

6.4 寛永二年六月十七日(1625年7月21日)の地震

この地震は、熊本での被害が大きく、とくに熊本城が破損し、死者も発生したという。

畿内では無感であったこの地震について、壬生忠利の記した『忠利宿禰記』には、「京より人下申候、肥後国大地震候由申候」(七月十九日条)と書き残されている。これにより、熊本での地震情報が、地震発生から約1か月を経て、京都にもたらされていたという事実を、少なくとも確認することができる。この記述は、畿内での無感地震について、遠隔地の地方都市における地震災害情報が、畿内に直接伝えられたことを示す最初の事例として、重要な意味を持つものといえよう。

6.5 寛永十年正月二十一日(1633年3月1日)の地震

この地震は、相模、とくに小田原での被害が大きく、小田原城および城下で、民家が倒壊・破損し、多数の死者が発生している。

慶長九年の地震の場合と同様に、畿内においてこの地震は無感であった。にもかかわらず、この地震の情報は、日野資勝の記した『資勝卿記』、および『孝亮宿禰記』に書き留められている。『資勝卿記』には、「自江戸申来、小田原ハ正月廿一日之地震ニ、多分ツブレ申候、箱根ノ山ノ石クヅレ出、路悪由也」(二月四日条)、『孝亮宿禰記』には、「小田原有地震、家数多顛倒、死人百五十人許有之云々、今日從江戸上洛人所語也」(二月七日条)と記されており、前者では地震発生後の12日後、後者では15日後に、どちらも江戸から上洛してきた者によって、小田原での被害情報が京都に届けられている。また、『孝亮宿禰記』の二月三十日条には、「伊豆国あた見の湯依大波破滅云々、江戸大地震有之由風聞」との記事もあり、熱海における温泉の被害状況も伝わっている。

このような小田原・箱根・熱海といった宿場町や街道近くの地震災害情報が、容易に京都へもたらされるようになったのは、宿場の設置など、慶長六年(1601)より進められてきた東海道の整備が、その背景にあることは確かであろう。たとえば、相国寺鹿苑院主(この頃は金地僧録)が記した『鹿苑日録』には、「出沼津、詣三島明神、上箱根下箱根、宿小田原、天気両日雖快霽、路泥尽未乾、宿小田原、小田原正月廿日暁大地震、家尽倒壊、宿処家無之故一家借之、地震以前者大宅也、破滅今小柴戸、立具防風雨而已、今日亦快晴、月色清朗、若有雨可難禦也」(二

月七日条)と書き留められており、記主の昕叔頭暉が、正月二十六日に京都を出発して江戸へ向かう道中、小田原の宿場が今回の地震で倒壊していたため、被災した民家に宿泊せざるを得なかったことが読み取れる。このように、地震の被害に遭う前には、すでに小田原では宿場が整備されており、東海道の往来は、かつてに比べてかなり容易になっていたものと思われる。また、寛永十年(1633)には、幕府公用の継飛脚の制度が実質的に確立され、町飛脚も寛永期には営業を開始していたと考えられている。寛永十二年正月二十三日(1635年3月12日)、江戸は地震によって大きな被害を受けているが、『資勝卿記』に、「去廿三日午刻、江戸大地震之由、今朝飛脚来」(正月二十六日条)とあるように、地震発生からわずか3日で、江戸の被害情報が、飛脚によって京都に届けられていたことが分かる。江戸期には、町飛脚による顧客への災害情報の通知が、商売として成立していく。当時、資勝は武家伝奏であったことから、これは継飛脚による伝達であると思われるが、少なくとも飛脚による京都への地震災害情報の通知という側面において、この事例はその最も早いものであろう。

以上の検討により、江戸初期における畿内からみた遠隔地の地震災害情報について整理しておきたい。慶長九年の地震以降、畿内における無感地震についても、遠隔地の地震災害情報が、畿内にもたらされるようになる。しかも、寛永二年の地震からは、江戸といった主要都市の情報だけでなく、遠隔地の地方都市の情報についても、直接的な伝達が始まった。たとえば、慶長十六年の地震における山科言緒・舟橋秀賢や、寛永十年の地震における昕叔頭暉などのように、日記の記主である公家や僧侶自身が、諸国を広範囲に往来するようになったことで、遠隔地への関心が高まってきたことなどは、そうした傾向を加速させた一つの要因として考えられるだろう。さらに、東海道の整備や飛脚制度の確立などは、畿内にもたらされる遠隔地からの地震災害情報を、量的に増加させるとともに、その速度の短縮にとっても、大きな役割を果たしたことは間違いない。

§7. おわりに

それではここで、はじめに設定した課題に沿って、本稿での検討から導き出された結論を、簡単に整理しておきたい。

まず、地震災害情報は、どのような経路・手段によってもたらされたか、といった課題については、記主による実見、使者の派遣、他者からの伝聞(来訪者からの伝聞や、訪問先での伝聞)、被災者からの報告、他国との往来や書状のやり取りなどの伝達方法を、確認することができた。このうちとくに、他国との往来や書状のやり取りといった情報伝達方法は、織豊期

の前後頃を境として、公私を問わず急速に広まっていくなりにあつたものと考えられる。

つぎに、地震災害情報は、どれくらいの速度でもたらされたか、といった課題についてであるが、遠隔地から畿内への情報伝達に要した日数を、時代順に並べてみると、11日(鎌倉→京都、正応六年の地震)、1か月以上(鎌倉→京都、永享五年の地震)、約1か月(伊勢・三河・駿河・伊豆→京都、明応七年の地震)、8日(美濃・尾張・近江→奈良、天正十三年の地震)、19日(江戸→京都、慶長九年の地震)、約1か月(熊本→京都、寛永二年の地震)、12日(小田原→京都、寛永十年の地震)、3日(江戸→京都、寛永十二年の地震)のようになる。最後の寛永十二年の地震を除くと、時代による特徴的な変化はなさそうである。ただし、寛永十二年以降をみると、たとえば、慶安二年六月二十一日(1649年7月30日)の江戸における大規模被害地震の情報は、4日後には京都に伝えられており(『忠利宿禰記』)、やはり、寛永年間以降における飛脚制度の確立によって、伝達速度が大幅に早まっていることが分かる。

また、畿内からみてどれくらい遠方の地震災害情報が、どの程度記録されたか、といった課題については、本論の中で時代ごとに小括したので、ここでは詳しく触れないが、概略を述べると、戦国期以前における地震災害情報が、鎌倉・紀伊・伊勢など、記主である公家・寺社にとって、政治的・宗教的に興味・関心の強い地域のものしか書き残されなかったのに対して、織豊期以降になると、彼らによる諸国への関心の高まりと、交通・通信網の整備により、畿内では無感であった地震さえ、遠隔地における地震災害情報が書き留められるようになったのである。

最後に、大地震の発生時に、どれくらい以前の地震災害情報がどのように参照されていたか、といった課題についてであるが、その前に、彼らがどのような方法で、過去の地震災害情報を知り得たかをまとめると、自分の経験、古老の記憶、保管された記録が、おもなものであった。そして、このうち記録の保管については、少なくとも室町期の段階で、太政官外記局によって、古代以来の地震に関する情報が蓄積・管理されていただけでなく、寺院などにおいても、過去の地震災害情報を旧記に書き留めていたことが判明した。

以上、本稿による検討は、同じ記主が書いた一つの日記を対象とした分析ではなく、その範囲を公家・寺社等によって畿内で書かれたものに限定しているとはいえ、鎌倉期から江戸初期に至る約450年間において、さまざまな記主が書いた日記を一律に扱ったものとなっており、それぞれの記主の身分や立場の違いなどについては、必要最低限の考慮しか行っていない。また、本稿は、たまたま今日まで伝存した日記のみを分析したものであって、本来ならばこれら以

外にも、地震災害情報の記録された日記が、多数存在していたことも確かである。とはいえ、本稿では、畿内で書かれた日記の中から、意図的にその一部を抜き出すことも、また、記主の身分や立場の違いによって、特定の日記にのみ重きを置くこともしていない。したがって、本稿で得られた結論には、地震災害情報から読み取れる諸事実について、一定の傾向性が反映されているものと確信している。

なお、大地震の後にしばしば飛び交う流言についても、地震を題材とした情報論においては、きわめて重要なテーマであるが、本稿では、まったく触れることができなかつた。これについては、元暦二年や文禄五年の地震後における、地震再来の流言などに触れた〔西山(1998, 1994), 松岡(2006)〕を参照されたい。

謝辞

本稿は、日本大学文理学部における私立大学学術研究高度化推進事業(学術フロンティア事業)「デジタルアーカイブ・インフラストラクチャの構築と高度利用」(平成15年度～平成19年度)の公開シンポジウムにおいて行った、「史的自然災害記録に関するデジタルアーカイブの構築」グループの最終報告の内容について、その一部を論文化したものである。報告に際しては、本グループのメンバーをはじめ、多くの方々から貴重なご意見を頂戴した。記してここに感謝申し上げます。

文献

安達正雄, 1979, 白山大地震により埋没した「帰雲城」と「木舟城」—第6報 両城をめぐる地震の被害, 震度分布, 余震等について, 日本海学会誌, 3, p61-76.

飯田汲事, 1978, 歴史地震の研究(1)—天正13年11月29日(1586年1月18日)の震害, 震度分布および津波について, 愛知工業大学研究報告, 13-B, p161-167.

飯田汲事, 1980, 歴史地震の研究(3)—明応7年8月25日(1498年9月20日)の地震及び津波災害について, 愛知工業大学研究報告, 15-B, p171-177.

飯田汲事, 1987, 天正大地震誌, 名古屋大学出版会, 552pp.

石橋克彦, 1983, 1433(永享5)年会津地震(M6.7)の非実在性, 地震, 2-36, p169-176

宇佐美龍夫, 2003, 最新版 日本被害地震総覧 [416]—2001, 東京大学出版会, 605pp.

宇佐美龍夫, 2007, 明応地震について, 日本歴史, 710, p34-35.

宇津徳治・嶋悦三・吉井敏尅・山科健一郎編, 2001, 地震の事典 第2版, 朝倉書店, 657pp.

北原糸子, 2003, 近世災害情報論, 塙書房, 381pp.

国立天文台(編), 2006, 理科年表 平成19年, 丸善, 1030pp.

酒井紀美, 1993, 情報の伝達はどのように行われていたか, 新視点 日本の歴史 4 中世編, 新人物往来社, p318-323.

酒井紀美, 1997, 中世のうわさ—情報伝達のしくみ—, 吉川弘文館, 226pp.

酒井紀美, 1999, 日本中世の在地社会, 吉川弘文館, 390pp.

寒川旭, 1987, 慶長16年(1611年)会津地震による地変と地震断層, 地震, 2-40, 235-245

高橋昌明, 2005, 日本史学者の見た元暦二年七月 京都地震について, 月刊地球, 27-11, p861-867

都司嘉宣, 1994, 歴史上に発生した津波地震, 月刊地球, 16-2, p73-85.

都司嘉宣, 2003, 慶長16年(1611)三陸津波の特異性, 月刊地球, 25-5, p374-381.

東京大学地震研究所(編), 1981, 新収 日本地震史料, 1, 193pp.

東京大学地震研究所(編), 1982, 新収 日本地震史料, 2, 575pp.

東京大学地震研究所(編), 1989, 新収 日本地震史料, 補遺, 1222pp.

東京大学地震研究所(編), 1993, 新収 日本地震史料, 続補遺, 1043pp.

西山昭仁, 1994, 文禄5年の伏見地震直後の動静—公家・寺院・朝廷を中心として—, 歴史地震, 10, p1-17.

西山昭仁, 1995, 文禄5年の伏見地震直後の動静 2—武家・民家を中心として—, 歴史地震, 11, p1-14.

西山昭仁, 1996, 文禄5年(1596)の伏見地震の被害実態—伏見城・方広寺大仏について—, 歴史地震, 12, p117-130.

西山昭仁, 1997, 文安6年(1449)京都地震の被害実態と地震直後の動静, 歴史地震, 13, p23-39.

西山昭仁, 1998, 元暦二年(1185)京都地震の被害実態と地震直後の動静, 歴史地震, 14, p19-44.

西山昭仁, 2000, 元暦二年(1185)京都地震における京都周辺地域の被害実態, 歴史地震, 16, p163-184.

西山昭仁, 2001, 元暦二年(1185)京都地震の被害実態, 月刊地球, 23-2, p104-112.

萩原尊禮(編著)・藤田和夫・山本武夫・松田時彦・大長昭雄, 1982, 古地震—歴史資料と活断層からさぐる—, 東京大学出版会, 312pp.

萩原尊禮(編著)・藤田和夫・山本武夫・松田時彦・大

- 長昭雄, 1989, 続古地震－実像と虚像－, 東京大学出版会, 434pp.
- 萩原尊禮(編著)・山本武夫・太田陽子・大長昭雄・松田時彦, 1995, 古地震探求－海洋地震へのアプローチ－, 東京大学出版会, 306pp.
- 松岡祐也, 2006, 『言経卿記』に見る文禄5年伏見地震での震災対応－特に「和歌を押す」行為について－, 歴史地震, 21, p153-164.
- 峰岸純夫, 2001, 中世 災害・戦乱の社会史, 吉川弘文館, 256pp.
- 文部省震災豫防評議会(編), 1941, 増訂 大日本地震史料, 1, 945pp.
- 八木伸二郎・伊藤英文・上田さち子, 1984, 天正地震－特に濃尾・近江・越中の被害について－, 歴史研究, 23, p1-53.
- 矢田俊文, 1998, 明応地震と太平洋海運, 民衆史研究, 55, p45-57.
- 矢田俊文, 2002, 日本中世戦国期の地域と民衆, 清文堂出版, 337pp.
- 渡辺偉夫, 1997, 1611年慶長三陸津波と地震について－1896年銘じ三陸津波と地震の比較－, 津波工学研究報告, 14, p79-88.
- 渡辺偉夫, 2002, ビスカイノが見た慶長(1611年)三陸津波, 月刊海洋, 号外 28, p10-14.

年月日(和暦)	年月日(西暦)	おもな被害地域	おもな被害状況	当該地震について記載のある畿内で書かれた日記(記主)	畿内での揺れの有無・程度
元暦二年七月九日	1185年8月6日	山城・近江(特に京都(白河)で被害大)	法勝寺・法成寺をはじめ京都の寺社・民家で倒壊・破損、死者多数	『山槐記』(藤原忠親)・『吉記』(藤原経房)・『玉葉』(九条兼実)	有感・大
正嘉元年八月二十三日	1257年10月2日	鎌倉	鎌倉の寺社・民家で倒壊・破損	なし	無感
正応六年四月十三日	1293年5月20日	鎌倉	建長寺の火災をはじめ鎌倉の寺社・民家で倒壊・破損、死者多数	『実躬卿記』(三条実躬)	有感・小
正和六年正月五日	1317年2月17日	京都	清水寺の火災をはじめ京都の寺社・民家で倒壊・破損、死者あり	『花園天皇宸記』(花園天皇)	有感・大
康安元年六月二十四日	1361年7月26日	畿内・紀伊・阿波・土佐	東寺・四天王寺・熊野大社などで倒壊・破損、摂津・阿波・土佐で津波、死者多数	『後愚昧記』(三条公忠)・『後深心院関白記』(近衛道嗣)・『忠光卿記』(柳原忠光)	有感・大
永享五年九月十六日	1433年10月29日	関東南部(特に鎌倉で被害大)	鎌倉の寺社・民家で倒壊・破損、死者あり	『看聞日記』(伏見宮貞成親王)・『満濟准后日記』(満濟)	有感・小
文安六年四月十二日	1449年5月4日	京都	仙洞御所・東寺・清涼寺をはじめ京都の寺社で破損、長坂口で山崩れ、死者あり	『東寺執行日記』(東寺執行)・『経覚私要鈔』(経覚)・『康富記』(中康富)	有感・大
明応七年六月十一日	1498年6月30日	西日本(特に九州で被害大か)	九州で寺社・民家の倒壊・破損、死者多数というが不明	『御湯殿の上の日記』(御湯殿女官)・『後法興院記』(近衛政家)・『親長卿記』(甘露寺親長)・『実隆公記』(三条西実隆)・『言国卿記』(山科言国)	有感・小
明応七年八月二十五日	1498年9月11日	東海地方	東海地方の太平洋岸で津波、死者多数	『御湯殿の上の日記』(御湯殿女官)・『実隆公記』(三条西実隆)・『後法興院記』(近衛政家)・『親長卿記』(甘露寺親長)・『言国卿記』(山科言国)・『和長卿記』(東坊城和長)・『忠富王記』(白川忠富王)・『大乘院寺社雑事記』(尋尊)	有感・大
文亀元年十二月十日	1502年1月18日	越後	越後国府の民家で倒壊、死者あり	なし	無感
永正七年八月八日	1510年9月11日	摂津・河内	四天王寺をはじめ摂津・河内の寺社で倒壊・破損、死者あり	『後法成寺関白記』(近衛尚通)・『実隆公記』(三条西実隆)・『拾芥記』(五条為学)	有感・大
天正十三年十一月二十九日	1586年1月18日	中部内陸・東海・近畿地方(特に飛騨・美濃・尾張・伊勢・近江で被害大)	東寺・三十三間堂をはじめ京都の寺社で破損、大垣城・長島城・長浜城および城下で火災・倒壊・破損、飛騨で山崩れ、死者多数	『舜旧記』(梵舜)・『東寺執行日記』(東寺執行)・『多聞院日記』(英俊ほか)・『御湯殿の上の日記』(御湯殿女官)・『宇野主水日記』(宇野主水)	有感・大
文禄五年閏七月九日	1596年9月1日	豊後	豊後で山崩れ・津波、死者多数	『言経卿記』(山科言経)・『孝亮宿禰記』(壬生孝亮)	有感・小
文禄五年閏七月十三日	1596年9月5日	山城・摂津・和泉(特に京都(伏見)で被害大)	伏見城・東寺・方広寺をはじめ京都の寺社・民家で倒壊・破損、死者多数	『義演准后日記』(義演)・『言経卿記』(山科言経)・『親綱卿記』(中山親綱)・『孝亮宿禰記』(壬生孝亮)・『舜旧記』(梵舜)	有感・大
慶長九年十二月十六日	1605年2月3日	関東から九州地方の太平洋岸	関東から九州地方の太平洋岸で津波、死者多数	『義演准后日記』(義演)・『孝亮宿禰記』(壬生孝亮)	無感
慶長十六年八月二十一日	1611年9月27日	会津	若松城および城下で寺社・民家の倒壊・破損、死者多数	(『言緒卿記』(山科言緒)・『慶長日件録』(舟橋秀賢))	無感
慶長十六年十月二十八日	1611年12月2日	三陸沿岸	三陸沿岸で津波、死者多数	(『言緒卿記』(山科言緒)・『慶長日件録』(舟橋秀賢))	無感
慶長十九年十月二十五日	1614年11月26日	京都	京都で寺社・民家の倒壊・破損、死者あり	『時慶卿記』(西洞院時慶)・『孝亮宿禰記』(壬生孝亮)・『言緒卿記』(山科言緒)・『鹿苑日録』(相国寺鹿苑院主)・『春日社司祐範記』(中臣祐範)	有感・大
慶長二十年六月一日	1615年6月26日	江戸	江戸で民家の倒壊・破損、死者あり	なし	無感
寛永二年六月十七日	1625年7月21日	熊本	熊本城が破損、死者あり	『忠利宿禰記』(壬生忠利)	無感
寛永十年正月二十一日	1633年3月1日	相模(特に小田原で被害大)	小田原城および城下で民家の倒壊・破損、死者多数	『資勝卿記』(日野資勝)・『孝亮宿禰記』(壬生孝亮)・『鹿苑日録』(相国寺鹿苑院主)	無感

【表】鎌倉期から江戸初期における大規模被害地震と畿内で書かれた日記